

# 守望者としての S. T. コウルリッジ

感覚主義批判と万人の平等 (下)

立 川 潔

『ウォッチマン』の目的 「科学と自由とキリストの真理のために」

1795 年は、前年からの厳冬、不作、さらに対仏戦争の継続などによって、食糧価格が異常に高騰した年であった。小麦価格は、すでに高値であった前年 2 月のほぼ 2 倍、1 クォータあたり 108 シリングになり、各地で食糧暴動が頻発していた。「ほとんど飢饉に近い年」となっていたのである (Coleridge [3] p. 29, n. 1; Thompson [45] p 156, 訳 167 頁参照)。10 月 29 日のジョージ 3 世襲撃事件は、「パンを！平和を！ピットを辞めさせろ！」という怒号に示されるように、この食糧難に加えて、93 年 2 月に始まった対仏戦争による負担増、さらに民衆にこれらの苦難を強いるピット (William Pitt) 政権への不満の現れであった (Patton [35] p. xxviii)。この事件を口実に、ピット政権は煽動集会法案および大逆罪法案という言論と集会の自由を抑制する二法案を提出し、より一層反動的な方向に舵を切ることとなった。このような緊迫した情勢の中で、「この法令の提出 (1795 年 11 月 10 日) から国王による裁可の受理 (12 月 18 日) までの期間が、民衆運動の最後のそして最大の時期であった」(Thompson [45] p. 159, 訳 170 頁) と評されるほど、法案に反対する大規模な示威運動がいたるところで起こったのであり、社会変革のうねりが生じているように思われたのである。

このような情勢の中で『ウォッチマン』の刊行は計画された。 - 2 - 2  
で見たように、コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) は、フランス革命以

降ヨーロッパ全体を通じて千年王国実現の戦いが決定的な局面を迎えつつあるという状況判断の下で、「血に染まっていない手で自由をその王座に据えるという偉大な目的を達成する」(Coleridge [2] p. 17) ことに専心する。コウルリッジは、国家と教会体制の腐敗に対する憤慨から「自由の友」となった人々が、情報統制の下、ピットによって送り込まれた煽動家の犠牲となっていることに注意を喚起していた。

「彼らは、聖職者を軽蔑する自然な感覚と压制者を憎悪する自然な感情とをふんだんに持っているので、気が狂った熱狂者の煽動的な熱弁にしか耳を傾けない。そして、そこから食物ではなく毒を、自由ではなく憤怒を吸収する。さらに、哲学によって啓蒙されず、より悪質な虐待によって復讐欲を刺激されているので、荒れ果てた正義の館に草が繁茂している間は、自由の祭壇を血で滴らせるであろう。彼らは、嫌悪すべき大臣が陰謀を捏造する原料となる。大臣は、彼らの中に、血に飢えた民衆煽動家に扮した悪賢い政治的怪物の輩を送り込み、「糺弾者となる前にまず誘惑者である」旧約のサタンさながら、少数者を反逆に誘惑し、全住民を奴隷に貶めようとする。」(Coleridge [2] p. 9)。

このように憤慨を動機とする改革運動が煽動と政府による情報統制によって「自由の祭壇を血で滴らせる」という認識をふまえて、コウルリッジは、政府の代弁者と化していた地方紙に対抗して客観的な「政治情報を提供ないし流布することを自らの義務と考え」『ウォッチマン』を刊行する(Coleridge [9] pp. 4-5)。こうして、危機の時代に政治状況を明確に指し示す守望者(Watchman)を自任した雑誌は、国内外の事件、議会演説、さらに政治的な論文と詩を掲載し、自ら執筆・編集する定期刊行物として、1796年3月1日付で第1号が刊行されることとなった。

ところで、コウルリッジは『ウォッチマン』の趣意書で、その主要な目

的を「(1) 今や法律として通過したグレンヴィル卿 (Lord Grenville) とピット氏の法案の廃棄を獲得するために、ウイッグ・クラブと協同すること、さらに(2) 頻繁な選挙と普通選挙権を獲得するために、パトリオティックな諸協会と協同すること」(Coleridge [9] p. 5) と明記した。しかし、『ウォッチマン』を一読すれば、これらが雑誌の目的ではなかったことは直ちに了解される。

まず頻繁な選挙と普通選挙権の獲得という目的は、それまでのコウルリッジの思想からは導出しがたい。事実、同じ趣意書の中で彼は「先立つ啓蒙がなければ、統治形態における変化は役に立たない」のであり、「腐敗と無知が支配的なところでは、最良の統治形態でさえたんなる「幻影！」にすぎない」ことを強調している (Coleridge [9] p. 5)。この文章からも、コウルリッジが、「パトリオティックな諸協会」とともに議会改革運動の一翼を担う目的で『ウォッチマン』を刊行したとは考えられないし、事実、誌上で議会改革が主張されることはなかった。

それでは二法案の廃棄を目的としたウイッグ・クラブとの協同はどうであろうか。『コウルリッジ全集』第2巻編者パットン (Lewis Patton) は、『ウォッチマン』が刊行された時点では、すでに議会を通過した二法に対する反対運動が急速に萎靡沈滞したことを指摘し、「コウルリッジは、ウイッグ派と同様に、二法に反対する運動を取り止めた」と結論している。しかし、編者の言うように「『ウォッチマン』は正統派ウイッグ路線を反映している」(Patton [35] p. xl) のであろうか。はたしてコウルリッジはフォックス派ウイッグが主導する運動に与しようとしていたのであろうか。むしろ、ウイッグ・クラブやパトリオティックな諸協会の運動に対して根本的な懐疑をコウルリッジは抱いていたのではなからうか。『ウォッチマン』第1号でコウルリッジはすでに可決された二法案について次のように述べている。

「理性的で漸進的な自由の友は、憤慨を抑えて、二つの最近の法案を論評しうる。それらは国制を侵犯しているけれども……もしそれらが、政治的な出版物の言葉をより冷静で抑えられたものにするならば、あるいは、しばらくの間、第一原理を教えたり、政治の基礎ないし本体であるべき一般知識を普及したりすることに我々の行動を制限するならば、無益ではなくなるであろう。」(Coleridge [9] pp. 13-14)

編者は、この文章を運動取り止めに對して自ら慰撫するために書いたと解釈している (Patton [35] p. xxxvii)。なるほどコウルリッジは『暴かれた陰謀』において、イギリスの国制は、出版の自由と請願の権利が担保されていることで、専制政にまで墮落していないが、二法案はそれらの権利を剥奪してしまうと厳しく攻撃していた (Coleridge [5] pp. 313-14)。上の引用から分かるように『ウォッチマン』においても、二法が「国制を侵犯している」との認識は変わっていない。しかし、で明らかにしたように、二法案が上程される以前から、コウルリッジは一貫して、自由の主唱者は、大衆の憤慨に頼るのではなく、「確固たる原理に基礎をおく」必要性を強調していたことに留意する必要がある。1795年2月に行った講義を基に出版した『コンシオーネス・アド・ポピュルム』においても次のように主張していた。

「政治制度の相対的な叡智は、必然的にその受容者の習俗と受容力に依存している。感覚主義者 (sensualists) や賭博師の一派が、維持することもできなければ、維持しようともしない自由を獲得するために、何故あらゆるものが混乱に投げ込まれなければならないのか。」(Coleridge [3] p. 47)

この文章は、「自称自由の友」の中でも「経済状態の平等ではなく、権利の平等を訴える」(Coleridge [3] p. 48) 人々を批判する文脈におかれてい

る。貧民の経済状態を不問にして政治的権利の平等だけを叫ぶ人々をコウルリッジは、『道徳および政治講義』の中でも次のように批判していた。

「彼らは、堅実に、しかし狭隘で自己中心的な見解を抱いて、自由の利益を追求している。彼らは、特権身分の廃止や、公民権からの排除によって虐げる法の廃止を、喜びをもって待ちこがれている。……彼らは、自分達の上にあるものは何であれ、喜んで引きずり下ろそうとする。ああ！しかし、滑車を使って引き上げようとはしないのだ。我々の貧しい同胞の階層を改善させ向上させる傾向があるものは何であれ、彼らは疑念に満ちた警戒心をもって、空想家の夢と見なしている。……貴族の子供じみた称号が、家庭の安楽を取り去り、知識の獲得を妨げているであろうか。むしろ毎日12時間働かざるをえなくさせている社会諸制度こそが、魂を奴隷にするのであり、理性的な存在を単なる動物に貶めているのである。欠乏という過酷な強制によって、自らの同胞を、心情を和らげ理解力を高めうるあらゆるものから遠ざけておいて、彼らに対して権利において平等だと呼びかけることは、彼らの不当な待遇を嘲弄するものである。」(Coleridge [2] pp. 11-12)

コウルリッジは、経済的困窮を強いる諸制度の廃止こそ自由にとって不可欠であると主張しているものであり、それは - 1 で見たように、「貧困は公的自由の死である」という聖書から導いた指針に基づくものであった。したがって、コウルリッジの立場は、けっして「正統派ウイッグ路線」を踏襲するものではないし、また「パトリオティックな諸協会」による政治的権利の獲得および議会改革運動に符合するものでもない。むしろ、政治的権利の平等だけを殊更問題とし、貧困を不問に付す「自称自由の友」とは改革の道筋を根本的に異にしていたのである<sup>1)</sup>。しかも、いっそう刮目

1) たとえばロンドン通信協会の闘士セルウォール (John Thelwall) でさえ、自

に値するのは、このような同胞の窮乏状態に対する無理解こそ、「憤慨した大衆の騒然とした暴動」を誘発し、流血の事態に至らしめていると認識していたことである。『ウォッチマン』でも次のように警告を発している。

「もしわが国の教会や他の礼拝所で髪粉をつけている人がいなければ、疑いもなく今日の悲惨さにふさわしくなるであろう。パークのあらゆる雄弁もピットのあらゆる甘言も次のような貧者の一言を撃退することはできない。「私は飢えています！あなたの髪に浪費しているものは私に僅かばかりのパンを与えてくれるでしょうに」。少なくとも自由の友は自らの行動を一貫させてほしい。この国民的な窮乏の時期に、男らしくない華美や贅沢な浮華によって貧民の羨望を掻き立てることはパトリオットにふさわしくない。これらの唾棄すべき馬鹿げた贅沢品は、貧者自身の生活必需品の欠乏及びその欠乏の増大と対照的に、ますます下層階級の心情を敵意あるものにし、彼らに復讐の行為を掻き立てることになるのだ。」(Coleridge [9] p. 80)

コウルリッジの批判の矛先は、パーク (Edmund Burke) やピットという体制擁護者、すなわちアリストクラットにのみ向けられているのではない。むしろ、髪粉に象徴される「男らしくない華美や贅沢な浮華」を装うパトリオットにこそ向けられているのである。 - 2 での結論を先取りすれば、

---

らの平等の主張が経済的な平等と誤解されることを恐れて次のように述べていた。「覚えておいてほしい。私は財産の平等を意図してはいない。それは現在の人間の知性や勤労の状態ではまったく不可能である。もし一度でもそのような狂気じみた途方もない制度を企てるように唆されるならば、全面的な略奪や暗殺によって、人殺しに、あらゆる財産を彼らの手に引き渡す機会を、さらに、あなたが現在不平を述べているいかなるものよりもはるかに耐え難い専制政を確立する機会を与えるだけであろう。私が意図する平等は権利の平等なのである」(Thelwall [44] p. 379)。このようなセルウォールからすれば、財産の廃止を展望するコウルリッジは、ジャコバンやデモクラットを超えた「熱烈な水平派 (leveller)」(Pollin and Burke [36] pp. 73-94) と映ったのは当然なのである (立川 [52] 47 頁参照)。

コウルリッジは、同胞の窮乏を思い遣ることができない、このような振る舞いを、「これ見よがしの感受性 (ostentatious sensibility)」に起因するものとして厳しく批判する。しかも、瞠目すべきことに、感覚主義から帰結し、パトリオットにも蔓延している、このような感受性こそ、「憤慨した大衆の騒然とした暴動」を誘発させているばかりではなく、他ならぬ「頻繁なる戦争や奴隷貿易」の主因であることをも告発しているのである。

そうであれば、趣意書で公言された目的を素直に受け取ることはできない。コウルリッジが趣意書にフォックス (Charles James Fox) を首領とするウィッグ・クラブや急進的な改革運動の党派との協同を掲げた理由は、趣意書を携えてイングランド中部地方を訪れたのと同様に、できるだけ多くの非国教徒や改革派を定期購読者として獲得し、雑誌の財政基盤を安定させるとともに、まず彼らを感じ主義から脱却させ、「社会を改善する考えられる最良の方法」(Coleridge [17] I, p. 126) としてキリストの原理を受容するように説得することにあつたように思われる。事実、『ウォッチマン』を創刊するために、1795年12月クリープトンからプリストルに戻る際書いた詩『隠棲の地を去るについての省察』には、自らの戦いの意図が端的に表現されている。

だから私は行く 頭と心と手をつにして  
科学と自由とキリストの真理のために  
無血の戦いを積極的に断固として戦うのだ

……

しかし時はまだ来ていない

おお、父よ、その時を急がせ給え！御国を来たらせ給え！

(Coleridge [16] I. p. 108)

コウルリッジにとって、『ウォッチマン』の刊行は、「科学と自由とキリ

ストの真理」のための、千年王国を平和的に実現する無血の戦いであった。彼にとって「科学と自由とキリストの真理」は一体のものであった。科学者とは、自然現象の中に神の叡智と仁愛とを発見し、人々を不信仰から救い出し千年王国への案内者となるべき人々であった(立川 [50] -2参照)。また -1で論じるように、人生を虚無から解放し、生命の意味を自覚させてくれる人々でもあった。コウルリッジは、『ウォッチマン』のラストヘッドにヨハネ福音書8章32節から採られた「真理を知らん、而して真理は自由を得さすべし!」という一文を掲げ、自由の獲得がキリストの真理と不可分な関係であることに注意を喚起している。で検討したように、コウルリッジにとって、感覚的な価値に左右されず、キリストの原理を自らの内的原理とした自律した存在によって、はじめて「市民的自由」は維持されるのであり、さらに究極的には「救世主が遣わされた目的」である「万人の平等」が実現されるはずであった。人間は「神だけの僕」であり、他の人間に隷属すべき存在ではない。偶像崇拜批判は、人間の傲慢さへの批判であるとともに、自由喪失への警告でもあった。「編集者は自らを公衆に忠実な守望者(WATCHMAN)となることを請う。そして政治的状况を明確に示し、群盗と暗殺者の攻撃から自由と自由の友を守るつもりである」(Coleridge [9] pp. 5-6) という『ウォッチマン』趣意書での決意表明は、このような「科学と自由とキリストの真理」という文脈の中で理解されるべきであろう。コウルリッジは『ウォッチマン』を通じて、感覚主義を批判し、キリストの真理に人々を立ち戻らせることを主要な課題としていたのである。

-2で明らかにしたように、コウルリッジは聖書からキリスト者の社会にとっての規範を読み取ったのであり、それは「万人の平等こそ救世主が遣わされた目的」というものであった。この目的は、私有財産が存在するがぎりは実現しえない。それにもかかわらず、公刊を目的とした『ウォッチマン』においては、私有財産の廃止は積極的に主張されてはいない。



しかし、それはコウルリッジがパンティソクラシーの理想を放棄したことを意味するわけではない<sup>2)</sup>。彼は、構想中の『宗教的黙想』の一節を載せて、パンティソクラシーの理想を謳っている。人間は、想像上の欲望によって、無垢で幸福な原初状態からあらゆる不幸に塗れた状態に墮落する。しかし、それらの不幸は、「人間の思考を終わりなき活動へと駆り立て」、「より偉大な善の直接的な源泉」(Coleridge [9] p. 131) となる。

このように貪欲から、奢侈と戦争から  
神聖な科学が生じ、科学から自由が生じたのだ (Coleridge [9] p. 131)

科学は自然界において神の存在を明らかにし、人々の信仰を深める。そして、信仰は感覚的対象に左右されることのない自己統治の力を人々に獲得させる。これら自律した人々が仁愛で結ばれた高次の共有社会であるパンティソクラシーを創造する。

戻れ純粋な信仰！ 戻れ柔和な敬虔！  
この世の王国はあなた達のものだ 各人の心情は  
自己統治され、夥しい人々で構成されている愛の家族が

---

2) コウルリッジ全集第1巻の編者の一人であるマン (Peter Mann) は、「1796年の初めまでには彼は共同所有の理想を放棄した」とし、その証拠として『ウォッチマン』第8号のバブーフ (François-Noël Babeuf) の理論についての論評を参照せよとしている(Mann [29] p. lxxii)。しかし、そこでのコウルリッジの言説 「アナキストは、実現可能な時には、すなわち大多数の人々が完全に賢明で有徳である時には、真実となる教義を唱道することによって、大衆の心をたゆまず誘惑する。この幸福な時の到来は、強奪の傾向を植えつけることによっては早められない。愛と知の広範に広がった影響力の下以外では1か月も続きえない体制は、無知な人々の憤怒と妬みではなくて、高貴な基礎の上に打ち立てられなければならない。」(Coleridge [9] p. 288) は、むしろ彼の一貫した主張、すなわち、共同所有の理想は、大衆の憤慨にもとづく政治運動によっては達成されえず、キリストの原理を内面化した人々が仁愛で結ばれる必然的な産物として達成されるという主張を裏書きしているのであって、「共同所有の理想」の放棄の引証とはなりえない。

共同の労働によって共同の土地から収穫し

その平等の生産物を享受する

(Coleridge [9] pp. 66-67)

このように『ウォッチマン』においても、新約から導いた、仁愛で結ばれた共有財産に基づく「万人の平等」、すなわちパンティソクラシーの理想が堅持されている。しかし、「万人の平等」は政治的に達成されるべき目的ではなかった。「政治について語るな。福音を宣べ傳えよ」(Coleridge [17] I, p. 127)<sup>3)</sup>。キリストの原理が内なる「カエサル」となれば、「万人の平等」はその必然的な結果として伴うものであった。富裕な非国教徒たちを定期購読者に取り込まなければならなかったコウルリッジにとって、私有財産の廃止を声高に叫ぶ必要はなかったのである。

### 感覚主義批判 仁愛と感受性

#### IV - 1 感覚主義と生命の意味の喪失

で若きコウルリッジが感覚主義という用語を、感覚的欲望に耽ることを意味するだけではなく、真理の基準を自らの感覚におき、感覚を超える真理の存在を否定する経験主義と同義で用いていたと指摘したが、まずその点を『ウォッチマン』刊行前の1795年の『啓示宗教についての講義』(以下、『講義』と略記)から確認しておこう。

彼は『講義』の第1講冒頭でアレゴリーを用いて多くの「自称自由の友」が陥っている状態を示唆している。彼らは、国教会体制の欺瞞と迷信から

---

3) 1794年11月6日付書簡で、パンティソクラシー計画への没頭を心配する兄ジョージに対して、「万人の平等の友は何をなすべきか」と問われれば、「政治について語るな。福音を宣べ傳えよ」と答えたと述べている (Coleridge [17] I, p. 126)。この言明は、「万人の平等」は大衆の憤慨にもとづく政治活動によっては実現せず、キリストの原理を内面化することによってのみ達成されると確信していたことを念頭におけば、兄の心配を払拭するためのたんなる口実ではなく、むしろコウルリッジの確信の表明と受け取ることができるように思われる。

逃れることができたが、これまでの経験から宗教それ自体に不信を抱き、かつ抑圧者に対する憎悪を抱いている。彼らが容易に煽動家の犠牲となり「自由の祭壇を血で滴らせ」てしまっているというコウルリッジの認識は、で指摘した通りである。彼らは真の宗教に従おうとせず、感覚主義と瀆神の洞窟に入っていく。アレゴリーは彼らの様子について次のように描いている。

「洞窟の入り口に二人の人物が座っていた。第一の人物は女性で、そのドレスと振る舞いから感覚主義であると分かった。第二の人物は、その振る舞いとその残忍な冷笑を浮かべた顔つきで自ら極悪非道な瀆神と名乗った。……その場の気配は不自然に冷たく、真ん中に眼の翳んだ老人が [ 顕微鏡で、足も頭もないトルソーの表面を凝視していた…… ]、……それに [ 自然！ ] と書いてあった。この老人は [ 自然と書かれたトルソーに ] 引き続き顕微鏡を用いて、その大理石の磨き上げられた表面に顕微鏡でしか見ることができない凸凹を数え上げて悦に入っているように思われた。彼は様々な言語で話し……諸原因の無限の連鎖について多くを語った。彼は、その連鎖を、後ろの盲人が前の盲人の裾を掴んで繋がっている盲人の列で、それが視界から消えるまで繋がっていて、足並みが全く乱れることなしに歩いているものとして説明した。誰が彼らを導いているのかと問うと、誰もいないと答える。盲人の列は、先頭なしに永遠に続くのだ、なぜなら盲人は躓くことなしに動けないけれども、完全な盲目が視力の欠落を埋め合わせるのだ。」( Coleridge [4] pp. 91-93; [ ] 内は編者による『俗人説教』からの補填部分)

腐敗した宗教に欺かれてきた人々の多くは、宗教それ自体を否定し、無神論と感覚主義に陥ってしまう。 で引用したプール (Thomas Poole) 宛書簡で、「顕微鏡」が経験主義者の認識の象徴とされていたように、ここでも

それは感覚主義者の認識を象徴している。感覚主義者は、「顕微鏡」を用いて細部の「凹凸を数え上げて悦に入る」だけで、全体としての美しさと意味を観照しえない。つまり、慈悲深い全能の神を認めることができないし、認めようとしな。ここで「様々な言語」とは、いたずらに「神秘」を展開し、「無限の諸原因の連鎖について多くを語る」が、第一原因としての神を認めることができないことの謂なのである(立川 [50] -2参照)。

ところで、アレゴリーでは、彼らは感覚主義と瀆神の洞窟に至る前に真の宗教に出会っている。

「彼女〔真の宗教〕は我々を〔生命の〕谷の中にある高台に連れて行った。その頂上で我々は平原全体を眼下に見下ろすことができ、その様々な部分の相互関係を観察できた。さらに、彼女は我々に眼鏡を与えた。それは我々の自然な視力と矛盾することなく、谷の遙か向こうを我々に見せてくれた。」(Coleridge [4] p. 91;〔 〕内は引用者。以下同様)

真の宗教は、我々の感官では捉えることのできない生命の谷の「遙か向こう」、すなわち来世が見える「眼鏡」を与えてくれる。来世が「自然な視力と矛盾することなく」見えるということは、真の宗教は神秘ではないことを意味する<sup>4)</sup>。感覚主義はこの「眼鏡」を通して見える真理を否定してしまうので、自然現象の因果関係は「盲人の列」として理解されてしまうというのである。このように感覚主義という用語は、経験を超えた真理を否定する経験主義と同義で用いられているのである。

ところで、コウルリッジにとって、来世における永遠の命の享受という真理こそが、現世の生に意味を与えてくれる。したがって、感覚主義は我々

4) コウルリッジにとって、真の宗教と対極的にある国教会は、「紫と緋色で装い、金や宝石や真珠で飾られ、額には「神秘」と書かれている」「専制政治の保母」(Coleridge [3] p. 30)であり、ヨハネの黙示録の大いなるバビロンのイメージである。

の生命から意味を剥奪するものとしても厳しく批判されることになる。この点で注目されるのは、ダーウィン (Erasmus Darwin) に対する評価である。1796年1月、コウルリッジは、『ウォッチマン』の定期購読者を募るための中部地方旅行中、ダービーでダーウィンと談話する機会をえるのだが、ダーウィンが宗教に関心を抱いていない、つまり sensual であることに衝撃を受け、次のような感想を洩らしている。

「ダーウィン博士は……最も独創的な哲学者です。彼はあらゆる主題で斬新な考えをします。しかし、宗教を除いてです。彼は宗教の主題で私を揶揄しました。……ダーウィン博士は、もし詳細に吟味することなしにハットンの地球の理論を否認したのであれば、それを恥じたでしょう。しかし、地球がどのように創られたかという知りえないことが、しかもたとえ知りえたとしても無益なことが、我々にとって何になるのでしょうか。この学説を、博士は厳密に研究してはじめて否認したのです。にもかかわらず、我々が、自然と名付けられた盲目の白痴から見捨てられた者であるのか、それともこの上なく賢明で計り知れないほど慈悲深い神の子であるのか、つまり、我々はこの地上で惨めな歳月を僅かながら過ごした後、暗黒の場所の土塊に墮すのか、あるいは我々がこの世の苦悶に耐えているのは、ひたすら永遠の幸福を享受できるように準備するためであるのかという重要な問題について、彼はいとも簡単に結論を出してしまうのです。彼には、これらの主題は哲学者の研究に値しないのです。」(Coleridge [17] I. p. 177)

本節冒頭の引用から明らかなように、コウルリッジにとって、「盲目の白痴」は感覚主義者の自然観を象徴する。彼は、近代地質学を基礎づけることになったハットン (James Hutton) の『地球の理論』にまったく関心を示していない。それは、ハットンの理論が、「我々が……この上なく賢明

で計り知れないほど慈悲深い神の子である」ことを証明していないように思われたからである。コウルリッジにとって、科学は、「永遠の幸福」の享受との繋がりぬきにはありえず、我々の生命に意味を与える宗教と切り離しえない<sup>5)</sup>。「科学と自由とキリストの真理」は一体なのである<sup>6)</sup>。我々

5) 若き日のコウルリッジのニュートン (Isaac Newton) 評価が揺らいでいるのもこの点を巡ってである。

1795年の『講義』では、ニュートンが、ロック (John Locke)やハートリ (David Hartley) と同様に、自然秩序に「神の明瞭で広漠たる支配」(Coleridge [4] pp. 149-52) を見出したことを、さらに彼の自然哲学の方法は神学研究にも適用され成功をもたらしたことを高く評価している (Coleridge [4]pp. 189-90)。

しかし、同じ95年にサツィー (Robert Southey) の『ジャンヌ・ダルク』に彼が執筆した部分(後に96年に『国民の運命』の一部となる)、すなわち

しかし自らを最も自由であると考える人もいる  
それは彼らがこの物質的で可視的な天体のなかで  
崇高な考えを束縛し、存在の階段を嘲笑し  
自らの下劣さを誇り、自らを騙すのに  
次のような習得した空虚な言葉を轟しくまくし立てる  
すなわち微細流体、衝撃、本質、  
自動機械、原因のない結果、そして  
あの盲目的全知者、あの全能の奴隷  
神を放逐した被造物

に、注をつけて、「アイザック・ニュートン卿の哲学は結果として無神論に至ると主張されてきたが、おそらくそれは故なしとはしない。というのは、もし物質がそれに与えられた力や属性によって可視的世界の秩序を生み出すことができるのであれば、さらに思想さえ生み出すことができるのであれば、なぜ物質は生得の権利 (*inherent right*) によってそのような属性を持たなかったのであろうか、そして神の必要性はどこにあるのか。物質は、機械論哲学にしたがえば、叡智も仁愛もなしに最も賢明にそして最も恵み深く行為することができるのだ。無神論者はそれ以上何を主張するのか。もし物質がこれらの属性をもつならば、なぜ物質は最初からこれらの属性をもっていなかったのか。……〔ニュートンの〕神は副摂政である第二原因によって退位させられているのである」と述べてニュートンの哲学が無神論に至る危険性を認めている (Coleridge [16] I. p. 132; II. pp. 1112-13)。そこから帰結するのは「あの盲目的全知者」という自然であり、神が放逐された世界なのである。96年12月のニュートンに対する積極的评价 (Coleridge [17] I. p. 280) を踏まえれば、この時期のコウルリッジのニュートン評価は揺らいでいる。しかし、いずれにしろ、ニュートン科学に対する評価が、真の信仰を擁護しているか否かを基準になされていることは明らかであろう。なお、コウルリッジがプリーストリ (Joseph Priestley) から継承した唯物論が、無神論に道を開く機械論哲学への批判であったことは、立川 [54] 167 頁注 12 を参照。

の現世における生命は、キリストの原理を内的原理とすることを通じて、来世における永遠の命を享受しうる。さもなければ「惨めな歳月」をこの世で過ごした後で土塊と化す虚無の生となる。コウルリッジにとって、感覚主義は我々の生命の意味をも剥奪してしまうのである。彼はゴドウィン (William Godwin) の『正義論』を「感覚主義の帮助者」と酷評し、その批判の書を執筆する目的を次のように述べていることもこのことを裏付けている。

「ゴドウィン主義の傲慢の体系の詳細な分析を行う。何を傲っているのか。宿命的な必然性によって支配された盲目の自然から見捨てられた者であることを。白痴の自然の奴隷であることを！」(Coleridge [18] I. 174)

コウルリッジにとって、感覚主義は、人間を「盲目の自然から見捨てられた者」という無意味な存在にしてしまう思想でもあったのである。

- 
- 6) プリーストリは、自らの自然哲学研究を神学研究とは区別されるべきものとしてではなく、むしろ千年王国の到来を預言する神学研究の一環として位置づけていた。彼は、1791年のバーミンガム暴動によってかの地を追われた後、ダーウィンの主導するダービー哲学協会から自然哲学研究への専念を求められた声明「あなたが不毛な神学論争から離れて、あなたを創始者と呼びうる哲学に、しかも世間を理性的に考えさせるように促すことで、人々を誤った信念に反対しうるように静かに先導し、さらに確実に迷信の支配を打ち破ることのできる哲学に、没頭されることを期待しております」(Priestley [39] p. 180) に対して次のように答えている。「私が依然として神学研究と哲学研究とを結びつけ、後者よりも前者を人類にとってはるかに重要であると考えていることをお許しください。と申しますのも、これらの研究はけっして妨げ合ったことはないのです、むしろ相互に深め合ってきたのですから、このことがこれからも正しいということをご理解ください」(Priestley [39] pp. 180-81)。1798年1月書簡でコウルリッジが正しく指摘しているように、「プリーストリが行ったあらゆる化学的実験は、彼のより崇高な神学的著作に双翼を与えた」(Coleridge [17] I. p. 372) である。そして『ウォッチマン』編集時のコウルリッジもまた、この書簡での言明と同様に、自らの課題を「私の〔哲学者としての〕知識によって宗教を見事に擁護し、私の〔詩人としての〕世評によって宗教の擁護に人々の注意をひきつけること」(Coleridge [17] I. p. 372) においていたことは間違いないのである。

しかし、本来この感覚主義に抗すべき宗教は、感覚主義に汚染され、むしろそれを助長してしまっている。コウルリッジは『ウォッチマン』第2号で「太陽系の高邁で単純な法則との類似からの国家教会擁護論」という国教会体制を皮肉る文章を載せている。「向心力とは、物体があらゆる方向から引き寄せられたり押しやられたりする力であり、一つの中心点としてのある点になんとしても向かう力である」というニュートンの定義を引用して、主教とチャプレンを惑星と月とする太陽系に国教会体制を擬えている。「太陽系の太陽と同じように、宮廷が教会の体系の中心にある。そしてその向心力は、贅沢な暮らしと実入りのよい顕職を授ける力」である。ここで「引き寄せられ」とは「無神論者、カトリック教徒、ジャコバイト、そしてジャコバンも、聖職禄や聖職者の地位の期待によって教会に誘惑されることを意味」し、「押しやられる」とは「親の権威や飢えの心配の力によって、多くの人々が、まったく信じる事ができないものに署名して同意することを強られるということの意味する。」(Coleridge [9] pp. 67-68)

このようにコウルリッジは、国教会が政治権力と結束して、宗教を富と名誉によって腐敗させ、その腐敗が人々を不信仰に陥らせていることを痛烈に批判している。彼らは「主教冠をかぶった無神論」(Coleridge [9] p. 66)を説いているのである。コウルリッジにとって真の信仰を人々に復活させること「戻れ純粋な信仰！ 戻れ柔和な敬虔！」こそが、虚無的な生から脱却し生の意味を回復する唯一の道であるとともに、さらに「社会を改善する考えられる最良の方法」でもあったのである。

#### IV - 2 「感受性は仁愛を妨げる」

- 2 - 2 で見たように、『講義』でコウルリッジは、感覚主義がキリスト教徒の間に広がることで富と名誉の利己的な追求が一般化し、万人の平等という教えが蔑ろにされてしまったことを力説していた。感覚主義が貧



しい人々や虐げられた人々を蔑ろにする。そうであれば、差別を助長する諸制度の廃止には、それを支えている感覚主義を脱し、キリストの原理に立ち返ることが必要であることを告げ知らせなければならない。『ウォッチマン』の主要な課題はそこにある。感覚主義が貧しい人々や虐げられた人々を蔑ろにするのは、富と名誉の利己的な追求だけによるのではない。感覚主義は、貧しい人々や虐げられた人々の存在を自らの感官から排除してしまう傾向を、文明化した社会に顕著な「感受性」として発現させる。コウルリッジにとって、このような感受性こそ仁愛を妨げるのである<sup>7)</sup>。

- 7) 1794年7月16日付サツイー宛書簡でコウルリッジは、啓蒙された知性と豊かな感受性をもった人道主義者が、貧しい少女の悲痛な声を、礼儀を弁えないという「正しい」理由をもって、自らの感官から排除しようとする出来事に衝撃を受けたことを記している。パンティソクラシー 引用文中ではパントクラシー は、このような人と人との分断を生み出している壁を取り除き仁愛の確立を希求したものであることを引用は示している。

「ラム肉、グリーンピース、サラダの正餐をとっているとき、飢えかけた病弱な赤ん坊を腕に抱えた少女がパブの窓から頭を入れ「どうか少しパンと肉を恵んでください」と言うことは、不正 (*wrong*) だと言うのだ！何故？それは不作法で厚かましい (*impertinent & obtrusive*) からだと言うのだ。僕は紳士だ！なにゆえ騒々しい悲痛な声を僕の耳に侵入 (*intrude*) させるのだ？この私の連れは、優れているというわけではないが陶冶された知性の持ち主なのです。彼の感情は完全に人類の味方です。しかし、それは冷酷な言葉です。いまだに存在する貴族の遺風が時にそのような言葉を誘発させるのでしょうか。パントクラシーの純粋な体制が自然の恵みを共有したとき、こうしたことは生じなくなるでしょう。」(Coleridge [17] I, pp. 83-84)

デイヴッド・ヒューム (David Hume) は論文「趣味の繊細さと情念の繊細さについて」において、感受性を情念の繊細さと趣味の繊細さに分け、対比的に論述している。情念に繊細な感受性をもつ人は、自分の自由にはなりえない幸運や不運がもたらす喜びと悲しみに自らの幸福を依存させるがゆえに、自らの気質の支配者にはなりえない。趣味の繊細さを持つ人も、情念の繊細さをもつ人と同様に、「礼儀正しく思慮分別のある会話」から「この上ない大きな気晴らし」を得、「粗野や不作法 (*impertinence*)」から「大きな仕打ち」を被る。しかし、「どのような本を読むか、どのような気晴らしに与るか、さらにどのような仲間と交わるかについては、かなりの程度自分で決めることができる」のだから、繊細な趣味の持ち主は「自分の幸福を主として自身に依存するようなものにおく」ことが可能になるとして、美醜に対する感受性を磨くことが個人の幸福にとって重要であることを指摘する (Hume [24] pp. 3-8, 訳 2 - 4 頁)。

さて、そうであれば、他者が「自分で決めることができる」領域に「侵入」

本節ではこの文明社会に顕著な感受性についての批判を中心に検討を加える。

コウルリッジは、第4号の論文「奴隷貿易について」において、「想像上の欲望 (*imaginary Wants*) の形成から生じた悪」の中で最も非人間的な、そして多くの人々に「慈愛に満ちた神の存在について気がかりな疑念を抱かせてきた」奴隷貿易が、「これ見よがしの感受性」に起因することを強調している。

「それでは奴隷貿易の最初の、そして常に作用している原因は何か。奴隷貿易を存在させているかの原因、それを失えば奴隷貿易がすぐに止む原因は何か。それは明らかに、その産物の消費ではなからうか。したがって罪は消費者にあるのではなからうか。……奴隷監督者や奴隷所有者について考えるな！まさにこれらの人々、彼らの汚された精神、そして野獣のようにされた心情は、あなた達への恐ろしい告発の一部を立証するであろう。彼らは奴隷よりも同情されるべきである。というのは、より墮落しているからである。私は……自らをキリスト教徒と公言するあなた達に語っているのだ。あなた達は来世でキリストとともに生きることを望んでいるのだから、他の人々が自分達になすべきと思うことを他の人々にするように命じられている。……あなた達は売られて、自分の病んだ肉体から立ち昇る熱と悪臭が厚板そのものを腐敗させるほどに、多くの同胞犠牲者とともに船倉に詰め込まれ後、焼き鑊を自分の胸に押しつけられることを望むのか。このようなことを他の人々があなた達にすることを望むのか。そのあからさまな考えを聞いて自愛的な戦慄 (*selfish horror*) で身の毛もよだつとしても、それでもあなた達はあえてそれを他の人々に与える張本人になろうと

---

したこの少女は、まさに「不正」ということになるが、この紳士の幸福追求は同時に「不作法」な少女との間に壁を設けることを意味する。この壁こそがコウルリッジにとって仁愛を妨げる障壁と認識されているのである。

するのか。立法府に請願することは、完全に誤っている。私は、いかなる場合においてもキリスト教徒が世俗権力の介入を求めることは正当化されないと確信している。しかも、現在の場合それは不必要であろう。自分がキリスト教徒であると公言するあなた達のわずか十分の一だけでも、請願者のわずか半分だけでも、これ見よがしの感受性で立ち回る代わりに、すべての西インド商品ではなくとも、一方は無駄なもので他方は有害なものである砂糖とラム酒だけでも慎めば、このすべての惨禍は止められるであろう。」(Coleridge [9] pp. 137-39)

コウルリッジにとって、奴隷貿易によってもたらされる産物は、いずれも「虚しい贅沢品」に過ぎず、「一つとして必要なものはない」。にもかかわらず、「これ見よがしの感受性」から消費されるこれらの奢侈品のために、貧者が必要とする必需品や安楽品が輸出されてしまう (Coleridge [9] p. 132)。しかも、「これ見よがしの感受性」は、このような感覚的欲望への耽溺によって貧者の必要物を奪うだけではなく、奴隷監督者や奴隷所有者の弾劾あるいは立法府への奴隷貿易廃止の請願を行うことで、自分を正義のキリスト者であるかのような慢心を抱かせる。しかし、弾劾は奴隷貿易の咎で自分を「告発」するに等しいのである。なぜならば、キリスト教徒であるにもかかわらず、奴隷の待遇が「自愛的な戦慄で身の毛もよだつ」ものであるにもかかわらず、「これ見よがしの感受性」から奴隷貿易によってもたらされる産物を消費しているかぎり、奴隷貿易の存続に手を貸しているからである。砂糖とラム酒の消費を控えるだけで奴隷貿易が廃止に追い込まれるという展望の妥当性はさておき<sup>8)</sup>、ここで刮目に値するのは、「これ見よがしの感受性」こそが、この忌まわしい貿易の元凶として特定

8) 砂糖とラム酒の不買運動によって奴隷貿易を廃止させようとした当時の論者としてウィリアム・フォックス (William Fox) がいる。彼の *An Address to the People of Great Britain, an the Propriety of Abstaining from West India Sugar and Rum* については編者注を参照 (Coleridge [9] p. 138, n. 2)。

されていることであり、この感受性で立ち回る人々こそその「張本人」と断定されていることである。

OEDによれば、18世紀から19世紀はじめにかけて、sensitivityは「洗練された情動の受容力、趣味に対する繊細な敏感さ、苦しみに対して思いやりを直ちに感じる事、文学や芸術に登場する哀れを誘う人々に直ちに感動させられること」という意味でも用いられた。コウルリッジは、まさにこのような感受性を、奴隷貿易の廃止法案が議会で否決される状況の中で、次のように皮肉を込めて批判している。

「多数者の間に観察されるのは、ただ不実でまがいの感受性 (a false and bastard sensibility) である。それは、忌まわしい光景や騒々しい叫び声によって彼らの感官を刺激し、彼らの利己的な楽しみを妨げる害悪を、そしてそれだけを取り除くように彼らに促すのだ。他の惨禍は、同じように明白ではるかに身の毛もよだつものであっても彼らは正そうとしないばかりか、それらに手を貸し、それらを食い物にして太るのである。もし、堆肥の山が彼らの応接間の窓前になれば、彼らはそれが存在していることを、そしてそれが彼らの有害な贅沢の温床であることを知っていても十分に満足している。この嘆かわしい欠点にこそ、我々は頻繁なる戦争や奴隷貿易の継続を帰さなければならぬ。商人は彼の元帳の中に奴隷貿易に反対する論拠を見出さないし、豪華な宴会に出席する市民は、奴隷船の悪臭や汚物によって吐き気を催すことはない。上品な淑女の神経は悲鳴によって害されることはない。彼女はウェルテルやクレメンティーナの洗練された悲哀に涙を流しながらでも、人間の血で甘みをつけられた飲み物を啜っている。感受性は仁愛ではない。それどころか、我々をつまらない不幸に慄くほど敏感にすることによって、しばしば感受性は仁愛を妨げるのであり、女々しい卑劣な利己主義 (effeminate and cowardly selfishness) を誘うのである。ミルトンの伏魔殿の地獄の諸王のように、我々自身の悲嘆は「巨大な」も

のとして王座に就かされるのに対して、我々の同胞被造物の不幸は矮小な形態に縮小され、無数の群集の不幸は心の暗い片隅に押し込まれるのである。たんなる感受性と仁愛とを常に分ける一つの基準がある。仁愛は行動に駆り立て自己否定を伴うのである。」(Coleridge [9] pp 139-40)

ここで批判の俎上に載せられている「不実でまがいの感受性」は、自らの「感官を刺激し」ないかぎり、いかなる同胞の不幸にも反応しえない感覚主義の帰結である。コウルリッジは、この感受性に「頻繁なる戦争や奴隷貿易の継続」の原因を帰しているのである。感受性は交際する他者の眼を意識するところから生じる。したがって、その交際から排除されている人々に対する同感を生じない。この感受性は自らの関心 (self interest) にかかわるところで、「利己的な楽しみを妨げる害悪」にのみ反応するのであり、他者のための自己犠牲を促すことはない。

「感受性は大いに文明化した社会に住む人の境遇に最もふさわしい性格である」(Smith [43] p. 209, 訳(下) 88 - 89頁)とアダム・スミス (Adam Smith) が言うように<sup>9)</sup>、感受性は洗練された社会に必要とされる資質であるがゆえに、感受性に対する評価は洗練、すなわち文明化に対する評価と位相を等しくする。この点でコウルリッジの立場を彼の敬愛するプリーストリと比較すれば、実は両者には根本的な思想上の違いがあることが了解されうる。

プリーストリは、北西ヨーロッパにおいて大領主の権力が15世紀の終わりごろまでに崩壊し、国内秩序の回復によって、商業と洗練が進展したことを、さらにトルコによるコンスタンティノーブルの占領が学芸の復活

---

9) 文明社会の陰の側面にも注意を怠らないスミスは、「文明諸国民において要求される繊細な感受性は時として男らしい志操堅固な性格 (the masculine firmness of the character) を破壊する」(Smith [43]. p. 209, 訳(下) 88頁)とも述べている。スミスの「男らしい」性格を破壊するという評価はコウルリッジの「女々しい」という評価に照応していることはいうまでもない。

と宗教改革を促進したことを次のように高く評する<sup>10)</sup>。

「商業が夥しく拡大した。ヨーロッパの海軍力が、新航路の発見、新大陸への植民などによって拡大した。さらにほぼ同時期に、トルコによるコンスタンティノープルの占領があった。これは、学識者がイタリアに逃避しヨーロッパにおける学芸の復活を促進するのをたすけ、教皇の巨大な権力を粉砕し宗教改革を早めるのに大いに貢献した出来事であった。製造業者が増加し始め、生活上の技芸の完成度が増し、奢侈が思いもよらないほど拡大した。このときになって、洗練と人間性は改善され、人間一般と獣との違いとほぼ同じ程度に、ヨーロッパの現在の住民と彼らの祖先とを分け隔てるに至ったのである。さらに言い添えるならば、これらの改善の結果、幸福が至大に高まり、地球上のこの地域は今や過去と比較して一つの樂園となったのである。」(Priestley [37] p. 211)

このようにプリーストリは、商業による文明化、洗練と人間性の改善の進展に、一層の樂園化を展望していた(立川 [51] 参照)。

---

10) コウルリッジも、『ウォッチマン』第1号の冒頭で、ヨーロッパにおける知識愛が1453年のコンスタンティノープル占領という惨禍によって刺激されたことを指摘している。惨禍も最終的には天恵となると捉える楽観主義をプリーストリから継承しつつも、コウルリッジに特徴的なことは、「知識のこのような最初の普及」が「ヨーロッパの聖職者を長い感覚主義のまどろみから目覚めさせたルター派」によって促されたことを指摘するなど、感覚主義からの覚醒との関係を強調していることである。感覚主義からの脱却こそが自由をもたらすという彼の主張は、それ故、その脱却に資するかぎり迷信にすら寛容な評価となる。すなわち、「迷信が市民的自由にとって好ましくないのは……感覚主義を教えるときだけである。他のあらゆる場合には、……不可視の観察者への畏怖ないし来世の報奨の希望を通じて……目前の衝動という暴政に対する偉大な勝利を、そしてきわめて大きな自己統治の力を意味する」と論じている(Coleridge [9] pp. 9-12)。この寛大とも思われる迷信に対する評価の背景には、感覚的な価値に左右されず、キリストの原理を自らの内的原理とした自律した存在によってはじめて「市民的自由」は維持されるという聖書から導いた指針がある。キリストの真理と自由とはコウルリッジにとって不可分な関係なのである。

「人間は生まれながら、利己的で感覚的であり (sensual)、さらに高慢、尊大、そして野蛮である。しかし、穩健、人道、謙遜の精神がなければ社交には良き調和も信頼もありえない。したがって、社交は、人間が極めて陥りがちなこのような悪徳を根絶ないし隠蔽するまでは、そして、それらと対立する徳を獲得ないし装うまでは、完全な状態には到達しえないのである。完全に悪徳を根絶したり徳を獲得したりすることは、大多数の人々からは期待しえない。したがって、体面と名誉の感覚から、彼らが見かけ上有徳であることを維持する術を学んでいる状態は、幸福な状態である。というのは、もしその見かけが習慣化し一貫したものであれば、それは社交において徳とほとんど同じ効果をもつことになるからである。」(Priestley [37] p. 343)

プリーストリにとって、人間が生まれながらにもつ悪徳は、社交によって、他者の眼を意識することから生まれる「体面と名誉の感覚」によって、根絶されるか、あるいはむしろ大多数の人間においては隠蔽される。マンデヴィルを彷彿させる率直さで、プリーストリは、「真の洗練とは、我々が会話する人々の気楽さと楽しみに極めて寄与するあの諸々の徳と気立てのよさにいつも動かされているように見せかける術」(Priestley [37] p. 343) 傍点は引用者による) だという。

これに対してコウルリッジは『ウォッチマン』第3号の論文「古代ゲルマン人の習俗と宗教に関する歴史的素描」の中で、「お定まりのエチケツトや虚しい礼儀正しさに長けた精神と繊細ですぐに衰微する流行によって柔弱となった肉体が洗練であるとするならば、私は野蛮人のテントの中の婦人の気高さを觀照することを望まざるをえない」と言明しているように、文明社会の習俗に極めて批判的である。彼は、文明社会の「女性の艶かしさと弱さがおもに内在するあの魅力的な溫柔」について「私は、メアリ・ウォルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) とともに「それは感覚主義の

哲学 (the philosophy of sensuality) である」と言わなければならない」と論じている (Coleridge [9] pp. 90-91)。つまり、プリーストリの高く評価した習俗の洗練化は、彼にとってはまさに感覚主義の瀾漫化と映ったわけである。古代ゲルマン人の習俗を高く評価することは、なるほど当時の共和主義者の文明社会批判と重なりあう。しかし、そこからコウルリッジの思想を共和主義思想と同定すべきではなかろう。彼の批判の矛先は感覚主義に向けられていたことが銘記されなければならないのである。

感覚主義の現れである感受性こそ「頻繁なる戦争や奴隷貿易の継続」の原因だと認識を抱いているコウルリッジにとって、自由や権利を擁護しようとするパトリオティズムが感覚主義に汚染されていることは見過ごすことのできない重大な問題であった。 で見たように、コウルリッジは、「男らしくない華美や贅沢な浮華によって貧民の羨望を掻き立てること」は、下層階級を自由ではなく復讐へと駆る「パトリオットにふさわしくない」行為と糾弾していた。第3号の論文「現代のパトリオティズム」においても、感覚主義に汚染された自称「パトリオット」を次のように批判している。

「私はあなた達のパトリオティズムを疑う。あなた達は奴隷貿易に反対の熱弁を振るう。現在の窮乏を戦争の所為にする。しかし、あなた達は髪粉をつけパイや砂糖を食している！ あなた達のパトリオティズムと人類愛はあなた達になにも失わせない。……あなた達がどうすればパトリオットになりうるかお教えしよう。あなた達の心情が、全体の善は各人の可能なかぎり最大の善であるということをし、したがって正しいことは、自分の利益なのだから、自分の義務でもあるということをしを信じなければならない。希望と畏怖を奪い去っている社会の現状においては、あなた達はこのことを信じるができない というのは、それは事実に合致していないからである。しかし、もしそれを信じなければ、あなた達はパトリオットで



はありえない。どうすれば我々はこの明白な矛盾を解消できるだろうか。あなた達は自らの感覚主義と自らの哲学、すなわち感覚主義の妓夫 (pimp) を捨てなければならない。あなた達は謙虚に神を信じなければならないし、来世の存在を信じなければならない！」(Coleridge [9] pp. 98-100)

ここでも、奴隷貿易に対する反対を声高に叫ぶこと、窮乏を戦争の所為にすることで自らを正義の側にいと慢心しながら、「髪粉をつけパイや砂糖を食する」現代のパトリオットが批判の俎上に載せられている。彼らが「下層階級の心情」(Coleridge [9] p. 80) や奴隷の境遇に全く考え及ばないことをコウルリッジは強く非難しているのである<sup>11)</sup>。そうであれば、私有財産批判や一般的啓蒙の必要性など多くの共通点をもちながらも、何故コウルリッジがゴドウィンに獅子身中の虫であるかのように厳しく論難するのか、その理由も理解しうるであろう。コウルリッジは、ゴドウィンの思想が、仁愛の基礎としての私的感情を否定した「感謝と家族の愛情に基づくすべての義務を否定するストア派の道徳」であることだけで批判したのではない<sup>12)</sup>。「感覚主義の妓夫 (pimp)」こそ、パトリオティズムの中に、「下層階級の心情を敵意あるものにし、彼らに復讐の行為を掻き立てる」原因、「頻繁なる戦争や奴隷貿易の継続」の原因、生命の意味を喪失させ

11) 「髪粉をつけパイや砂糖を食する」現代のパトリオットと対照的に高い評価が与えられているのがメソディストである。彼らは「貧民に対する愛情を感じ」「貧民の教育と慰安に対して堅忍不拔の熱意をもって打ち込んで」いるからである。コウルリッジはメソディスト派の熱狂には批判的であるが、「メソディストの熱狂がどれほどばかげているとしても、もしメソディストが下層階級の間禁酒と家庭的な性質を生み出すとすれば、彼らは下層階級が自由を受容しうるようにさせることを我々は忘れるべきではない」と述べている (Coleridge [9] pp. 12-13)。また、心情と知性の統一を、「メソディストの熱意と哲学者の見解」の統一として表現し、その統一をもって「自ら直接に貧民の中にいて、貧民が自分たちの権利を行使できるようにするために、彼らに義務を教える人こそが、真理を普及する最も親切で最良の方法を採用することになる」(Coleridge [3] p. 43)と主張している。

12) 私的感情を基礎としてのみ仁愛は形成されるという観点からのゴドウィン批判については上川 [54] 165 - 66 頁の注 11) を参照。

る原因を持ち込む元凶であるとの断定を踏まえれば、コウルリッジにとって「自称市民的自由の友の間で人気の書物」であるゴドウィン『正議論』 「感覚主義の幫助者 (Pandar (*sic*))」 は、なによりも糾弾されるべき対象であったのである<sup>13)</sup>。

コウルリッジにとって、自由の実現は、「髪粉」という感覚的な装飾を脱ぎ捨て、真の信仰に、キリストの原理に基礎づけられなければならない。「希望と畏怖を奪い去っている社会の現状」とは、 - 2 - 2 で示したように、商業によって生み出された悪徳が「神の姿を隠」し、「奢侈と欲望が生み出した腐敗した産物としての人間」だけが跋扈するために、神への恐れと永遠の命の希望が失われ、人々が「神の仁愛に対して疑念を抱き不信仰に陥」っている状態を意味する。そこでは、各人の利益と全体の利益が一致しないために、それが一致しうること自体信じられないことになる。コウルリッジによれば、仁愛とは「各人の利益と全ての人々の利益は同一であるという確信を身につけることで永続化される自然的共感」(Coleridge [9] p. 132) である。それゆえ、現状では、人々は、仁愛を身につけることができないし、つけようとしてもしないことになる。コウルリッジにとって、このように神を見失い感覚的欲望を利己的に追求することは、「この地上で惨めな歳月を僅かながら過ごした後、暗黒の場所の土塊に墮する」という虚無的な生を意味したのである。

なるほど『ウォッチマン』では、直截に私有財産制度を批判した論文を掲載しているわけではない。共有財産にもとづく将来社会も で引用した詩の形式で表明されているにすぎない。しかし、これはコウルリッジが聖

---

13) コウルリッジは、ロンドン通信協会の活動家で、95年煽動行為の罪で流刑地に護送され翌年死亡したジョウゼフ・ジェラルド (Joseph Gerrald) が、奴隷貿易を支持する文章を書いたという噂を「完全には拭いきれなかった」として、その理由を「その犯罪行為をゴドウィンの道徳体系からも導くことは巧妙さを発揮すれば可能であると思えるからだ」と述べている (Coleridge [17] I. p. 215)。いかに彼がゴドウィンの思想を「感覚主義の幫助者」と考えていたかを示唆する文章である。

書から導いたパンティソクラシーの理想を放棄したことを意味するわけではない。『ウォッチマン』の購読者が富裕な非国教徒達であったことを考えれば、財産の共有を主張することは得策ではなからう。さらに、彼にとってなによりも重要なことは、私有財産制度の廃止ではなく、その必然的な結果が私有財産制度の廃止となる原理、つまりキリストの原理を、自らの内なる「カエサル」とした、感覚的对象に魅了されることのない自律的な人々の拡大であった。このような人々が拡大すれば私有財産制度は必然的に廃止されるであろうと展望していたのである。彼が一貫して主張していたことは、直接的な政治行動による差別的な諸制度の廃止ではなかった。コウルリッジがなによりも強く主張していたことは、感覚的对象を偶像視する感覚主義からの脱却であった。奴隷貿易の反対を声高に叫ぼうが、現在の窮乏の原因を戦争に帰そうが、感覚主義を捨ててキリストの教えに立ち返らなければ自由を獲得し維持しえない。コウルリッジにとって正義とは、「全体の善が各個人の善である」状態である。正義を「認識し抽象的な命題として同意することは容易」だが、「葉を糧にする虫が、葉の色あいを帯び、葉が自らの糧であることを自らのあらゆる微細な繊維にまで示すのと同じように、心情も、真実を糧にする」ことが必要なのである (Coleridge [17] I, p. 115)。それはコウルリッジが聖書から導き出した指針であった。「自由の友」の多くは、腐敗した宗教を宗教それ自体と誤認して不信仰に陥り、不信仰ゆえに感覚主義に陥っている。コウルリッジが『ウォッチマン』を出版した背景には、このような感覚主義に汚染された「パトリオット」をキリストの真理という確固とした原理に向かわせ、「万人の平等」という「救世主が遣わされた目的」を実現していくという展望があったのである。

『ウォッチマン』最終号を刊行した 1796 年 5 月 13 日にセルウォールに宛てた書簡は、このことを明瞭に示している。そこで、コウルリッジは、私有財産が諸悪の根源だという聖書から導き出した洞察を堅持しつつも、

その廃止を訴えるのではなく、その必然的な結果が私有財産制度の廃止となる原理を、「精神が受け入れられるように準備」することを、すなわち感覚主義からの脱却を引き続き強調している。

「気まぐれ、墮落そして売春の眞の源泉は、財産です。財産は、あらゆる善いものと混ざり合い、それらを台無しにしますし、疑いもなく、あらゆる悪の源泉です。「しかしキリスト教徒でなければパトリオットにはなれません」。そうです！セルウォール！シャフツベリー卿とルソーの弟子であるばかりではなくてイエスの弟子でもあるセルウォールよ！しかし、希望を感官の対象を越えて彷徨わせようとする人は一般に感覚主義的となるでしょう。再度私は、感覚主義者はパトリオットにはなれないだろうと断言します。」(Coleridge [17] I. pp. 213-14)

コウルリッジにとって、この世で「永遠の幸福を享受できるように準備する」ことは、「各人の利益と全ての人々の利益は同一であるという確信」から「救世主が遣わされた目的」である「万人の平等」を実現することであったのである。

「おお、守望者！汝の覚めをりしは徒勞なりき」

これまで見てきたように、1796年に刊行された『ウォッチマン』は、95年の『講義』で展開した感覚主義批判と万人の平等の主張を人々に浸透させ、「科学と自由とキリストの眞理のために／無血の戦いを積極的に断固として戦う」ことを目指したものであった。『講義』において、コウルリッジは、共有財産の下での「万人の平等」の実現こそ「救世主が遣わされた目的」であることを聖書に依拠して論証した。しかし、私有財産の廃止は、政治的な革命によって成し遂げることはできない。ユダヤの国制が教えたように、自由が与えられても人々が感覚的对象に魅了される他律的存

在であるかぎり、すなわち、感覚の対象を偶像として崇拜する傾向をもつ存在であるかぎり、自由を維持し続けることは不可能である。それゆえ、感覚主義から脱却して、その必然的な結果が私有財産制度の廃止となる原理、すなわちキリストの原理を受容することが、「救世主が遣わされた目的」の実現にとって不可欠とされたのである。『ウォッチマン』は、千年王国実現の戦いが決定的な局面を迎えつつあるという状況判断の中で「血に染まっていない手で自由をその王座に据えるという偉大な目的を達成する」使命を与えられた守望者としての自覚をもって、このキリストの原理を人々に受容させることを意図していたのである。

しかし、『ウォッチマン』は、発刊後僅か2か月余り、第10号で廃刊せざるをえなくなった。で指摘したように、『ウォッチマン』廃刊後数年でコウルリッジの私有財産、商業、あるいは政府に対する見解は大きく転換していく。ジャコバンから保守主義者への転向と言われてきた変化である。そうであれば、『ウォッチマン』が廃刊に至らざるをえなかった原因は、その変化と無関係ではなからう。

ところで、この変化は、従来言われてきたように、フランスとイギリスの急進主義に対する幻滅によるものなのであろうか。本稿で詳細に検討したように、コウルリッジがイギリスの政治改革運動に対して一貫して批判的な立場に立っていたことは明らかであろう。なるほど若きコウルリッジの思想は私有財産の廃止を展望していることをもってすれば、後に彼自身がいかに否定しようとしても、「ジャコバン主義とは進取的な才人たちの一国の財産に対する蜂起である」(Burke [1] p. 241) というパーク的な意味でのそしてコウルリッジ自身継承した意味での ジャコバン主義であったと言えよう(立川 [52] -1参照)。しかし、政治運動が貧民の経済状態を不問に付していることを厳しく糾弾しながらも、彼自身は私有財産の廃止を政治運動に求めてはいなかった。むしろ、政治運動の指導者であった「自由の友」が「これ見よがしの感受性」に塗れていることを痛烈に批

判していた。コウルリッジにとって、この感受性から帰結する同胞の窮乏状態に対する無理解こそ、「憤慨した大衆の騒然とした暴動」を誘発し自由の大義を傷つけるとともに、さらに「頻繁なる戦争や奴隷貿易」の主因でもあったのである。そうであれば、フォックス派の政治活動や非国教徒が主導する急進的な運動は、それ自体としては、彼にとってはじめから期待されるべきものではなかったことは明らかであろう。「私の見解は……ピット派、フォックス派、デモクラット派の三つの知名の党派全てからほとんど等しく隔たっていた」(Coleridge [15] I, p. 187) という『文学的自伝』の文章は、自らがジャコバンであったことを隠蔽しようとした文章として悪名高いのだが、それら三つの党派がいずれも感覚主義に汚染しているという彼の認識を踏まえれば、詭弁を弄した言説とは言えないのである。

それでは、フランスの事態がコウルリッジの思想上の変化を促したのであるか。なるほどフランスの行動が、『ウォッチマン』刊行中という僅かな時期においてコウルリッジを大いに失望させたことは事実である。彼は、第1号では、イギリス議会における度重なる和平動議に対する与党議員の反対理由を詳細に掲載し、対仏戦争の不正義を訴え、国民的偏見を取り除こうした(Coleridge [9] pp. 16-26)。しかし、4月11日付の第6号では、ピシュグリュ(Jean Pichegru)の辞任が「フランス政府の拡張主義の精神(a spirit of aggrandizement)」によるものではないか、もしそうであれば、「フランスの自由にとって致命的となる」(Coleridge [9] p. 209)との懸念を表明するに至る。さらに、フランス側の和平交渉拒否が明らかにされたウィックハム(William Wickham) = バーテレミ(François Barthélemy) 往復書簡を7号に掲載し、第8号で論文「フランス立法者への抗議」を掲載するに及ぶ。そこで彼は、フランスによる「オランダの不法占有は、正義(Justice)の基礎の上では擁護されえない」ことを指摘し、自由のための戦いから野心のための戦いへと変質していることを厳しく糾弾している(Coleridge [9] pp. 271-73)<sup>14)</sup>。

しかし、解放の理念がフランスの国家利益の手段となっていく事態に対する失望にもかかわらず、廃刊後もしくはフランスの事象を千年王国という「祝福された未来」を樹立する不可避な条件と見なし続けていたのも事実なのである。1796年12月11日のフラワー (Benjamin Flower) 宛書簡でも、フランスの「大量殺戮」に嫌忌を示しつつも、フランスの動きが千年王国実現の契機であるとの確信は揺らいでいない。

「実際、私は、フランスに関心を抱いていません。『ウォッチマン』のある号で、私は「フランス立法者への抗議」を書きました。それは私の政治的見解を含んでいますが、その時以来のフランスの輝かしい勝利も私の政治的見解になんらの変更も生み出しませんでした。私は、大量殺戮を読むのに飽き飽きしています。もっとも、もし私の理性と感情が最終結末 (the final Event) にあまり関心を抱いていないとすれば、私は人間の名に値しないでしょう。そうです。私の好奇心は、その過程の詳細に関しては消滅してしまったことを告白します。」 (Coleridge [17] I, pp. 268-69)

さらに付け加えるならば、コウルリッジは、フランスの無神論的な傾向

- 
- 14) コウルリッジは、後に『フレンド』において理性と悟性、正義と慎慮の区別を強調するに至るが、この時期のコウルリッジは、正義と慎慮の区別を「宮廷の奸智」としている。すなわち、フランスは、オランダ占領を、オランダの住民自身がフランスとの合同を望んでいること、およびオランダを以前の専制政に引き渡すべきではないことを論拠に維持し続けているが、コウルリッジは、占領は「いかなる国民も他の国の問題に干渉する権利をもっていない」という「一般法」に反する行為だとし、「オランダの不法占有は、正義 (*Justice*) の基礎の上では擁護されえない。その慎慮 (*Policy*) のみが考慮されることになる。お、フランス！ 汝の立法者はすでに、正義と慎慮の違いについて知るほど卑しむべき宮廷の奸智に墮落してしまったのか？」と論難している (Coleridge [9] pp. 271-72)。さらに、「不満を抱く群衆が、本質的に自由を破壊するような規制を、あなた方の自由を維持するために必要にしないであろうか。パトリオットと思われる人々の中には、出版の自由を制限することが時宜に適している (expedient) とすでに考えているのではなかろうか」 (Coleridge [9] p. 272) と論述し、フランスが正義と慎慮を使い分け、慎慮を口実に正義を蹂躪している君主国と同様の状態に陥ることに強い警告を発している。

や過激な行動を支持したことは決してなかったものであり、その意味で、「私の見解は、フランスの形而上学によっても、フランスの政治学、フランスの倫理学、さらにフランスの神学によっても汚染されておりません」(Coleridge [17] I. p. 395) という1798年3月の兄ジョージ宛書簡における弁明 これまた悪名高い文章だが も、決して虚言ではなかったのである。

そうであれば『ウォッチマン』の廃刊、さらには思想上の変化へと導く原因は、フランスやイギリスの急進主義に対する失望に起因するものではなく、むしろ感覚主義から脱却しキリストの原理を受容すべきという彼自身の警告が受け入れられなかったことに求められるべきであろう。彼は、『ウォッチマン』最終号の「読者への挨拶」において、「もし預言者の言葉、「おお、守望者！汝の覚めをりしは徒勞なりき」が私にも完全に当てはまるならば、それは性向や努力の不足ではなくて能力の不足に帰されなければならない」(Coleridge [9] pp. 374-75) と自らの能力不足が廃刊の原因であるかのように論述して終止符を打っている。しかし、その直後の1796年5月5日付プール宛書簡の中では、「おお、守望者！汝の覚めをりしは徒勞なりき」と預言者エゼキエルは言いました。そのとき彼は、悲しみに青ざめた私の頬を感じ取って預言したのだと思います」(Coleridge [17] I. p. 208) と述懐して、自らの警告が、旧約の預言者と同様に、受け入れなかったことに対する失望をより率直に吐露している。この失望こそコウルリッジに『ウォッチマン』を廃刊させたのである。そして、思想上の変化を準備させたと言えるのではなからうか<sup>15)</sup>。

15) 感覚主義から脱却しキリストの原理を受容すべきであるという彼の主張は、私有財産や商業などに対する評価の変化後も一貫している。たとえば、1799年4月6日付のプール宛書簡でもコウルリッジは、民衆の生来の墮落性をめぐって次のように述べている。「あなたの召使とストウエイの民衆一般について、私があなたに彼らの生来の墮落性 (depravity) を印象づけた時、浅はかにも不機嫌になりましたね。宗教的な喜びと宗教的な畏怖がなければ、社会の下層階級からは何も期待することはできません いずれにしてもいかなる階級も宗



[ 参 考 文 献 ]

- [ 1 ] Burke, Edmund, *Two Letters on a Regicide Peace*, 1796: in *The Writings and Speeches of Edmund Burke*, vol. 8, edited by L. G. Mitchell, Oxford, 1990.
- [ 2 ] Coleridge, Samuel Taylor, *A Moral and Political Lecture, delivered at Bristol*, Bristol, 1795: in [19] vol. 1.
- [ 3 ] , *Conciones ad Populum: or Addresses to the People*, Bristol, 1795: in [19] vol. 1.
- [ 4 ] , *Lectures on Revealed Religion, Its Corruptions and Political Views*, Bristol, 1795: in [19] vol. 1.
- [ 5 ] , *The Plot Discovered: or An Address to the People, against Ministerial Treason*, Bristol, 1795: in [19] vol. 1.
- [ 6 ] , *Lecture on the Slave-Trade*, Bristol, 1795: in [19] vol. 1.
- [ 7 ] , ‘Fragments of Theological Lectures’, 1795: in [19] vol. 1.
- [ 8 ] , ‘A Sermon’, 1796: in [19] vol. 1.
- [ 9 ] , *The Watchman*, 1796: in [19] vol. 2.
- [ 10 ] , *Poems on Various Subjects*, reprint of the first ed., 1796, London, introduced by Jonathan Wordsworth, Oxford and New York, 1990.
- [ 11 ] , *Essays on His Times: in The Morning Post and The Courier*, in [19] vol. 3.
- [ 12 ] , *The Friend: A Series of Essays in Three Volumes: To Aid in the Formation of Fixed Principles in Politics, Morals, and Religion with Literary Amusements Interspersed; 1809-10, 1812, 1818*, in [19] vol. 4.
- [ 13 ] , *The Statesman’s Manual: or The Bible, The Best Guide to Political Skill and Foresight*, London, 1816: in [19] vol. 6.
- [ 14 ] , *A Lay Sermons: Addressed to the Higher and Middle Classes on the Existing Distresses and Discontents*, London, 1817: in [19] vol. 6.
- [ 15 ] , *Biographia Literaria: or Biographical Sketches of My Literary Life and Opinion*, London, 1817: in [19] vol. 7.
- [ 16 ] , *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge: including Poems and Versions of Poems Now Published for the First Time*, edited by Ernest Hartley Coleridge, 2 vols. Oxford, 1957.
- [ 17 ] , *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, edited by Earl L. Griggs.

---

教的な喜びと畏怖なしに断固とした態度を示すほど強いとは私には思えません  
患まれた個人はいるでしょうが階級はいません。」(Coleridge [17] I. p. 480).

- 6 vols. Oxford, 1956-71.
- [ 18 ]       , *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*, edited by Kathleen Coburn, 5 vols, New York and Princeton, 1957-2002.
- [ 19 ]       , *Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*, gen. Ed. Kathleen Coburn, 16 vols so far published, Princeton, 1969-.
- [ 20 ] Colmer, J. A., *Coleridge: Critic of Society*, Oxford, 1959.
- [ 21 ] Edwards, Pamela, *The Statesman's Science: History, Nature, and Law in the Political Thought of Samuel Taylor Coleridge*, New York, 2004.
- [ 22 ] Godwin, William, *An Enquiry Concerning Political Justice, and Its Influence on General Virtue and Happiness*, 2 vols, 1793, London.
- [ 23 ] Hartley, David, *Observations on Man, His Frame, His Duty, and His Expectations*, 2 vols, reprint of the 1791 ed., London; Poole and Washington D. C., 1998.
- [ 24 ] Hume, David, *Essays, Moral, Political, and Literary*, originally published in 1754; edited by E. Miller, 1985, Indianapolis, 田中敏弘訳『ヒューム道徳・政治・文学論集』名古屋大学出版会, 2011年.
- [ 25 ] Jasper, David, 'Preserving Freedom and Her Fiends: A Reading of Coleridge's Watchman (1796)', *The Yearbook of English Studies*, vol. 19 pp. 208-18, 1989.
- [ 26 ] Kitson, Peter J., "'The electric fluid of truth": The Ideology of the Commonwealthman in Coleridge's The Plot Discovered': in Kitson, Peter J. & Corn Thomas N., *Coleridge and the Armoury of the Human Mind: Essays on his Prose Writings*, London, 1991.
- [ 27 ] Kitson, Peter J., 'Political thinker': in Lucy Newlyn ed, *The Cambridge Companion to Coleridge*, Cambridge, 2002.
- [ 28 ] Leask, Nigel, *The Politics of Imagination in Coleridge's Critical Thought*, Basingstoke, 1988.
- [ 29 ] Mann, Peter, 'Six Lectures on Revealed Religion, its Corruptions and Political Views,': in [19] vol. 1.
- [ 30 ] Malachuk, Daniel S., 'Coleridge's Republicanism and the Aphorism in *Aids to Reflection*', *Studies in Romanticism*, vol. 39, No. 3, Fall 2000.
- [ 31 ] Mee, Jon, *Romanticism, Enthusiasm, and Regulation: Poetics and the Policing of Culture in the Romantic Period*, Oxford, 2005.
- [ 32 ] Miller, J.T., *Ideology and Enlightenment: The Political and Social Thought of Samuel Taylor Coleridge*, New York and London, 1987.

- [ 33 ] Morrow, John, *Coleridge's Political Thought: Property, Morality and the Limits of Traditional Discourse*, Basingstoke and London, 1990.
- [ 34 ] Morrow, John, 'Introduction' in *Coleridge's Writings: On Politics and Society Vol I*, Basingstoke, 1990.
- [ 35 ] Patton, Lewis, 'Editor's Introduction,' in [19] vol. 2.
- [ 36 ] Pollin, B.R. and Burke R., "John Thelwall's Marginalia in a Copy of Coleridge's *Biographia Lieteraria*," *Bulletin of the New York Public Library*, 74, 1970.
- [ 37 ] Priestley, Joseph, *An Essay on a Course of Liberal Education for Civil and Active life*, 1765: in [40] vol. XXIV.
- [ 38 ] , *Disquisitions Relating to Matter and Spirit*, 1777: in [40] vol. III.
- [ 39 ] , *An Appeal to the Public on the Subject of the Riots in Birmingham*, Birmingham, 1791.
- [ 40 ] , *The Theological and Miscellaneous Works of Joseph Priestley*, vols. I–XXV, edited with notes by Rutt, J. T., Bristol, 1999.
- [ 41 ] Robbins, Caroline, *The Eighteenth-Century Commonwealthman: Studies in the Transmission, Development, and Circumstance of English Liberal Thought from the Restoraton of Charles II until the War with the Thirteen Colonies*, originally published in 1959, Indianapolis, 2004.
- [ 42 ] Roe, Nicholas, *Wordsworth and Coleridge: The Radical Years*, Oxford University Press, Oxford, 1988.
- [ 43 ] Smith Adam, *The Theory of Moral Sentiments*, originally published in 1759, ed. by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Oxford, 1976: 水田洋訳『道徳感情論』(上)・(下), 岩波書店, 2003年.
- [ 44 ] Thelwall, Cecil, *The Life of Thelwall*, vol.I, London, 1837.
- [ 45 ] Thompson, E. P., *The Making of the English Working Class*, reprinted by Penguin Group, London, 1991: 市橋秀夫 / 芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社, 2003年.
- [ 46 ] , *The Romantics: England in a Revolutionary Age*, Woodbridge, 1997.
- [ 47 ] Wright, Luke Savin Herrick, *Samuel Taylor Coleridge and the Anglican Church*, Notre Dame, 2010.
- [ 48 ] Wylie, Ian, 'How the Natural Philosophers Defeated the Whore of Babylon in the Thought of S. T. Coleridge, 1795-1796', *The Review of English Studies, New Series*, Vol. 35, No. 140 (Nov., 1984), pp. 494-507.
- [ 49 ] , *Young Coleridge and the Philosophers of Nature*, Oxford, 1989.

- [ 50 ] 立川潔「若き S. T. コウルリッジの急進主義思想（上） ブリステル道徳および政治講義の啓示宗教的基礎」『成城大学経済研究所経済報告』No. 30, 2001年.
- [ 51 ] , 「市民的自由と洗練された習俗 ジョウゼフ・プリーストリと近代ヨーロッパ君主政」『経済学論叢（中央大学）』第44巻5・6合併号, 65 - 85頁, 2004年.
- [ 52 ] , 「若きコウルリッジの道徳および政治思想（上）」『成城大学経済研究』第175・176合併号, 39 - 73頁, 2007年.
- [ 53 ] , 「若きコウルリッジの道徳および政治思想（下）」『成城大学経済研究』第177・178合併号, 57 - 98頁, 2007年.
- [ 54 ] , 「守望者としての S. T. コウルリッジ 感覚主義批判と万人の平等（上）」『成城大学経済研究』第193号, 145 - 77頁, 2011年.

[ 付記 ]

本稿は平成22年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。